

NOBUTAKA YOSHIZAWA KOTO RECITAL ~node~

吉澤延隆 箏リサイタル ～ノード～

2023年11月26日（日）14:30開場／15:00開演
トーキョーコンサーツ・ラボ

[主催] 吉澤延隆箏曲研究所

[後援] フィンランド大使館 | 日本・フィンランド新音楽協会
東海大学教養学部芸術学科音楽学課程

[助成] Madetoja Foundation | スカンジナビア・ニッポン ササカワ財団

ごあいさつ

本日は、『吉澤延隆 箏リサイタル ～ノード～』にご来場くださりまして、誠にありがとうございます。

この公演は、1974年に初めて行なわれたフィンランドの作曲家 P.H.ノルドグレン（1944-2008）と当時の「邦楽四人の会」という、その時代を牽引していた邦楽アンサンブルが行った交流を讃えるとともに、これからの新たなnode（能動的な結び目）をつくるために開催します。

プログラムでは、互いの文化を持ち寄り“新しい箏曲”をつくるためのプロジェクトを2018年から行なってきたユハ・T・コスキネン（1972-）氏と、2021年のヘルシンキ現代オペラ芸術祭においてオペラ《眠る男》（台本：池田理代子）を手掛けるなどフィンランドの次世代の作曲家として大変注目されているエートゥ・ランタ＝アホ（1992-）氏のお二人に箏と弦楽四重奏のための新作を委嘱しました。

また、フィンランドの作曲家で初めて邦楽器に関わったP.H.ノルドグレンに加え、フィンランド音楽の祖ともいえるJ・シベリウス（1865-1957）、現代の作曲家として今年6月の訃報が世界中のファンを哀しませたK・サーリアホ（1952-2023）によるそれぞれの作品を箏で演奏します。本来はギター、ピアノ、アルトフルートのために作曲された音楽を箏で取り組むことは、ほとんど無謀な試みです。しかし、その音楽を初めて聴いた時の印象は邦楽器が持つ特長や日本でも親しまれるような旋律が感じられました。それらの作品に取り組むことで、私がこれまで演奏してきた箏という楽器や音楽を見直すきっかけになるのではないかと考えました。

今回の創造的な新作を作曲してくださったコスキネン氏、ランタ＝アホ氏、共演を心よくお引き受けくださった中澤沙央里氏、迫田圭氏、福田道子氏、鈴木皓矢氏に、この場をおかりして心より御礼申し上げます。



吉澤延隆（箏・十七絃箏・二十絃箏） Photo by TAMAKI YOSHIDA

吉澤延隆箏曲研究所代表。2007年 東海大学大学院芸術学研究科修士課程修了。これまでに第15回賢順記念全国箏曲コンクール第1位・賢順賞、宇都宮市より「うつのみや市民賞」、第10回「宇都宮エスペール賞」を受賞。13年 CD「KOTO Nobutaka Yoshizawa」をリリース。16年より栃木県「とちぎ未来大使」に就任。

21年より、異なる分野のアーティストや専門家をつなぐコンサート・プロジェクト「NOBU-LAB.」（ノブラボ）をスタートし、22年に開催した『大谷石蔵の響き～とちぎ未来大使を迎えて～』は令和4年度「厚生労働省社会保障審議会推薦児童福祉文化財」に決定。

23年に開催した『BALLARE ～箏と舞踊の出会い～』は、令和5年度「こども家庭庁こども家庭審議会推薦児童福祉文化財」に決定。

23年神奈川県大和市より令和5年度「文化芸術未来賞」を受賞。

現在、東海大学教養学部芸術学科非常勤講師、東京文化会館ワークショップ・リーダー、滋賀県立文化産業交流会館「邦楽専門実演家養成事業」講師。日本・フィンランド新音楽協会会員。毎月28日は、ニューズレター「koto-nobu-log.」をウェブ発刊中！

PROGRAM

ペール・ヘンリク・ノルドグレン (1944-2008) Pehr Henrik Nordgren

《フラッターリング》 《ダンス》

Fluttering Dance

カイヤ・サーリアホ (1952-2023) Kaija Saariaho

《風の色》

Couleurs du Vent

ジャン・シベリウス (1865-1957) Jean Sibelius

《8つの小品》

8 petits Morceaux Op.99

—休憩 Intermission—

ユハ T・コスキネン (1972-) Juha T. Koskinen

《沈香の拡張》 箏と弦楽四重奏のために 委嘱新作・世界初演

Jinko-Expansion for Koto and String Quartet W.P 2023

ユハ T・コスキネン (1972-) Juha T. Koskinen

《薄氷》 十七絃箏のために

Usugori for 17-string bass koto

エートゥ・ランタ＝アホ (1992-) Eetu Ranta-aho

《エア・ダンスズ》 箏と弦楽四重奏のため 委嘱新作・世界初演

Air dances for Koto and String Quartet W.P 2023

PROGRAM NOTE

ペール・ヘンリク・ノルドグレン

《フラッターリング》 《ダンス》

二十絃箏独奏：吉澤延隆

この《Fluttering》と《Dance》はギターソロのために作曲された作品で、おそらく組曲として作曲された可能性があり、楽譜の入手はできませんでしたが1977年に初演された記録のある《Butterflies》（蝶）と共に組曲とされていたと考えられます。

短2度で上下繰り返される6連符が“パタパタする”を思わせる《Fluttering》と太鼓の棹打ちと童歌の様なフレーズが度々出現する《Dance》です。

カイヤ・サーリアホ

《風の色》

二十絃箏独奏：吉澤延隆

フルートによるヴィブラート、ダブルトリル、ブレストーン、微分音、発声奏法などが盛り込まれた《Couleurs du Vent》は、そのタイトル通り様々な“風の色”を思わせるアルトフルートのための作品で、1999年にCamilla Hoitenga氏によってLemi-Lappeenranta音楽祭で初演されました。

この曲を初めて聴いた時、「ムラ息」「コロコロ」といった同じような奏法があり、尚且つ、自然ともれた息から倍音が生み出される尺八の音色を思い浮かべました。その管楽器のための音楽を弦楽器で試みることに意義はあるのかと問われそうですが、この作品が西洋や東洋を越えた管楽器の作品として日本の尺八奏者が取り組んでくれることを願ってプログラムします。

ジャン・シベリウス

《8つの小品》

二十絃箏独奏：吉澤延隆

動きのある「ユーモアな小品」、軽快で活発な「スケッチ」、ゆっくりと哀愁のある「思い出」、運動性を持った「即興曲」、気持ちよく歌う「対句」、イタリア語で元気の意「アニモーソ」、小さく甘い「ワルツの時間」、突き進んで終わる「小行進曲」の8つからなるピアノ曲です。どれも短いですが、その美しい旋律は自然と箏の音色に合うように思えます。

委嘱新作・世界初演
ユハ T・コスキネン

《沈香の拡張》 箏と弦楽四重奏のために

十三絃箏：吉澤延隆
第1ヴァイオリン：中澤沙央里
第2ヴァイオリン：迫田 圭
ヴィオラ：福田道子
チェロ：鈴木皓矢

《沈香の拡張》（2023）は、箏と笙の二重奏曲《沈香》（2020）を基にしています。その二重奏曲は新型コロナウイルスの世界的流行によりコンサートが中止となり、初演されませんでした。この新しいバージョンでは、笙パートを弦楽四重奏に転写し、箏パートは変更しませんでした。私は、その新しいバージョンを書く際に、笙の伝統的な雅楽のハーモニーを研究しました。そして、笙では扱うことができない音域を加えました。

原曲からの構造は変更していませんが、新しいバージョンではJ.S. バッハのカンタータ「O heiliges Geist- und Wasserbad」（BWV 165）からの短い引用を加えました。この作品の終わりに出てくる、その引用部分に歌詞はありませんが、箏奏者が歌い、弦楽四重奏の演奏者は短いテキストの断片をささやきます。これにより、大規模な作曲プロジェクトである私の未完のオペラにつながる関連性が明らかになります。そのオペラは、明患上人の夢日記（夢記）に基づいています。その夢の一場面、明患上人は弥勒菩薩の楽園であり、香り高い水で入浴できる場所である兜率^{とそつてん}天に入ります。

ユハ T・コスキネン、愛知 2023年11月8日

ユハ T・コスキネン

《薄氷》 十七絃箏のために

十七絃箏独奏：吉澤延隆

十七絃の箏のための「薄氷」は吉澤延隆のために書きました。これは私の初めての箏独奏曲です。秋とのつながりはタイトルの中にすでに含まれています。北国や山々では晩秋に薄い初氷が湖を覆います。その澄んだ氷はとても美しく、輝く鏡のようです。しかしそれは同時に危険なものでもあります。人はその薄氷の上をあまりにも早く歩くべきではありません。

スコアのはじめの部分に能「竜田」からの引用句「和光同塵（光を和らげて、人に同ず）は結縁の始め…」があります。この句は中国の天台宗の開祖、智顛（ちぎ）の講義に基づいて書かれた仏教の論書「摩訶止観」からとったものです。私は特に「結縁（けちえん）」という言葉に特に興味があります。私の作曲が度々そうであるように、「薄氷」でも様々な素材が縦に横に網目のように結び付けられています。良い例として挙げられるのは作品の最後にある歌の部分です。歌詞の原文は「一字金輪」（奥義に達した仏様の像）から来ていますが、メロディーはハイネ・リッヒ・ハイネの詩にフェーリクス・メンデルスゾーン・バルトルディが曲をつけた「旅の歌」Op.34, No 6 “Der Herbstwind Der Herbstwind rüttelt die Bäume”（秋風が木をゆすっている…）からとっています。

ユハ T・コスキネン、ベルリン 2018年10月7日（訳:中村幸栄）

委嘱新作・世界初演

エートゥ・ランタ＝アホ

《エア・ダンスズ》 箏と弦楽四重奏のため

十三絃箏：吉澤延隆

第1ヴァイオリン：中澤沙央里

第2ヴァイオリン：迫田 圭

ヴィオラ：福田道子

チェロ：鈴木皓矢

《Air Dances》は、軽快な作品です：私は箏のための作品の多くが非常にシリアスな雰囲気を持っていることに気がきました。その上で、私は私の新しい作品で、それらとは何か違うことをしたかったのです。

これはダンスのコレクションです：それらはメヌエットやワルツ、その他の架空のダンス要素が含まれており、その中には猛烈なものもあれば、非常に静かで繊細なものもあります。私の心の中では、それらが軽やかに空中で舞い、あるいは自由に落下したりする様子が浮かんでいます。けれど、あなたはあなた自身がそれらのダンスをどの様に踊りたいか想像してください！

冒頭では、弦楽器のグリッサンドを伴った箏がいくつかのコードを演奏しているのが聞こえます。これは新しいダンス場面への招待や方向性を示す様なものであり、作品の中で何度か現れます。

私はとても楽しみながら箏のための作品を書きました。それが《Air Dances》に反映されていることを願っています！



Photo by Pekka Lehtonen

ユハ T・コスキネン（作曲） Juha T. Koskinen

1972年、フィンランド生まれ。シベリウス音楽院にて作曲の修士課程を修了。「リヨン国立高等音楽院」、IRCAMで学ぶ。カレヴィ・アホ、パーヴォ・ハイニネン、カイヤ・サーリアホ、フィリップ・マヌリに師事。近年では2023年1月に、指揮者・新田ユリ氏率いる愛知芸大ウインドオーケストラによって、管楽器と打楽器のための《声心》(2010/23)が再演された他、日本では2022年に声明と弦楽三重奏のための「仏手柑」が世界初演され、2023年10月にはピアノのための「柳宿」が、東京で世界初演される。

現在、愛知県立芸術大学作曲科客員教授。<https://jtkoskinen.net/>



Photo by Kai Widell

エートゥ・ランタ＝アホ（作曲） Eetu Ranta-aho

1992年生まれ。2019年フィンランド国立ヘルシンキ芸術大学シベリウス音楽院音楽修士として優秀な成績を修め修了。

2013年ガーナ国立ケープコースト大学へ1 Semester、2016年より2017年東京音楽大学へ1年間の計2度の交換留学を経験している。

2018年8月、Hvitträsk 室内楽芸術祭招聘作曲家。2018年フィンランド音楽財団、2019年スカンジナビア・ニッポン ササカワ財団、フィンランド文化財団より1年間の助成金授与。

2019年ラジオ・クラシック（フィンランドで最大のクラシック音楽専門ラジオ局）主催テンポ・アワーズ作曲家部門受賞。マルティン・ウェゲリウス賞受賞。

2021年、オペラ「眠る男」はヘルシンキ現代オペラ芸術祭に初演されて、池田理代子の台本に、ランタ＝アホが音楽を作曲した。芬日協会、フィンランド音楽財団、フィンランド作曲家協会の資金を授与。2022年再びフィンランド文化財団より1年間の助成金授与。フィンランド作曲家協会とMusic Finlandの一員。



中澤 沙央里 (ヴァイオリン)

桐朋女子高校音楽科を経て、桐朋学園大学音楽学部卒業。

これまでにトンヨン国際音楽祭、中国ASEAN音楽週間、サイトウキネンフェスティバル松本等に出演。また、セギカレッジ(マレーシア)、慶熙音楽大学(韓国)、上海音楽院(中国)等で客員講師を務めるなど後進の指導にもあたっている。

2013年度トーキョーワンダーサイト・レジデントアーティスト。日本・フィンランド新音楽協会会員。神奈川県立相模原弥栄高校音楽科非常勤講師。



迫田 圭 (ヴァイオリン)

東京音楽大学大学院に給費奨学金を得て入学、修了。第28回市川市新人演奏家コンクール弦楽器部門最優秀賞。

現在、おーけすとら・ぴとれ座にてコンサートマスターを務めている他、オーケストラトリプティーク、Malus Quintet、Green Room Playersにヴァイオリン、ヴィオラ奏者として在籍している。町田コダーイ音楽院、WE LOVE MUSIC、神奈川県立相模原弥栄高等学校にて講師を務める。



福田 道子 (ヴィオラ)

桐朋学園大学音楽学部を経て、同大学研究科、桐朋オーケストラアカデミー修了。2013-14年、兵庫芸術文化センター管弦楽団レジデント・プレイヤー。トリトン晴れた海のオーケストラメンバー。現在、国内オーケストラへの客演、また室内楽奏者としてバロックから新曲初演まで幅広く活動している。



鈴木 皓矢 (チェロ)

桐朋学園大学チェロ科を首席卒業後、渡欧。ハンス・アイスラー音楽大学ベルリン修士課程修了。小澤征爾音楽塾に参加。ラス・コルツ国際器楽コンクール入賞。日本チェロ協会主催「第9回チェロの日」にソリストとして出演。各地のオーケストラで客演首席を務める他新曲初演の場にも多く携わる。TRIO VENTUS、Eureka Quartetのメンバーとして国内主要ホールにて積極的な室内楽活動を展開中。